

2017年法科大学院全国統一適性試験

第1回 講評

2017年6月4日

LEC 専任講師 永野康次

1. 試験全体について

(1) 総説

今回の試験は、昨年度の基本的な日本語力等を端的に問うという傾向から、やや事務処理に重点をおいたものへと変化しました。2007年以降の出題に近いといえます。また、第1部で特に事務処理型の問題が増加し、過去に実施されていた大学入試センター主催の適性試験で見られたような問題も散見されました。

具体的な出題傾向としては、第1部につき、形式論理の要素をもつ問題の出題比率が昨年よりも減少し、その代わり事務処理能力を問う出題が増加しました。法科大学院における学習の前提となる頭の回転の速さや、論理的な処理手順などを端的に問う年度だったといえます。

なお、難易度としては、第1部について作業時間が増えた分、差がつきやすい回といえ、第2部は前年とほぼ同じ、第3部は前年よりやや難となっているため、全体としての平均点は昨年と同程度か、やや下がるでしょう。また、例年通りの内容として、すべての部を通じて、難易度の高い問題とそうでない問題の落差がありますので、難問を後回しにして易問を取りこぼさないようにするという時間管理が有益だったといえます。加えて、過去問で出題されていた問題とほぼ同じ出題もありますので、そうした平易な問題を確実に正解することが高得点獲得のポイントといえます。

(2) 出題内容

例年どおり、1部～3部のすべてにおいて、「それほど難易度の高くない問題を短時間で解かせる」という傾向が維持されました。ただし、第1部においては問題ごとに解答にかかる時間の違いが非常に大きなものとなっています。また、第2部は、実施初年度に立ち返ったともいうべき素直な問題が多かったものの、第1部ではこれまで受験生が目にしたことのないような問題も出題されました。

各部ごとに概観していくと、第1部は、問いの形式として、これまでの過去問とやや異なるものも見られました（問題10や問題23）。これらは、形式論理の要素と資料解釈を併せて1つの問題としたり、ていねいに読み時間をかけなければ解答しにくかったりするため、やや時間がかかったと思われます。

また、難易度としては、時間のかかる作業中心の問題は当然見られたものの（問題12、16、18、23など）、多くは適切に事前準備をしていれば、容易に解答可能なものでした。時間のかかる問題はあえて後回しにするなど、いわゆる“試験慣れ”しているか否かによって、点数に差が出たと思われます。

第2部については、適性試験実施初期頃である2003年や2004年に見られたような、いわゆる単純作業型の問題が目立ちました。地道に作業をこなしていけば正解を得られますので、試験の途中で集中力を途切れさせないことがポイントだったといえます。問題3についてはいろいろなパターンを検討する必要がありますので、やや時間がかかったと思われますが、講義や過去問を用いて事前対策をしていた受験生にとってはそれほど苦にならない問題だったと思われます

第3部については、例年通りの傾向でした。ただ、各小問で設問文のどこを参照すべきか明示しない小問が多かったため、昨年と比べ、解答にやや時間を要します。なお、最後の問題4は設問文が読みにくく、各小問の問いもやや難問となっていますので、時間管理が特に重要だったといえます。

(3) 難易度・傾向等について

第1部：問題ごとに、解答にかかる時間の差が大きかったことが今年度の特徴です。また、昨年度と比較して、形式論理の比率が減少し、その分、表中に具体的な数字が与えられた上で解くタイプの問題（問題11）や、第2部の問題を簡略化したようないわゆるパズル系問題が見られました。

これを踏まえると、第2回目の試験では、形式論理に関する問題と、オーソドックスな論理問題の比率がやや増加すると予想されます。そのため、第2回の試験に向けては実施当初の問題が参考となります。

なお、上記以外の出題としては、長文読解的な要素を持つもの（問題24）、論理構造を把握させるもの（問題2、13、17、22）など、典型的なものが出題されました。

第2部：すべての問題について、特別な着眼点や解法は要求されておらず、2003年や2004年における出題のように、必要な作業を淡々と行えば正解を導くことができます。もっとも、過去問演習が十分ではなく、こうした基礎的な作業に慣れていなければ時間がかかりますので、その意味では、差がつきやすい内容となったといえます。従来の過去問と比較して特徴的な問題といえるものも特に存しませんが、特に差がつきやすい点を挙げるならば、問題3について、数多く考えられるゲームの結果につき、メモなどを使って整理することでしょうか。

その他、問題1、2、4については、やや作業量は多いものの、行うべきことは明確ですので、純粋な事務処理が問われたものといえます

いずれの問題においても、着眼点によって時間を大幅に短縮できるわけではないため、与えられた作業をせざるを得ず、過去問を解きなれていない方にとってはややつらい年度になったのではないのでしょうか。

受験戦略としては、すべての問題について、短時間で解ける(1)～(4)を確実にとり、残った時間で各問の(5)(6)を解くとよかったです。

第3部：従来の日弁連型とほぼ同じ出題です。問題1と2については、各小問で参照箇所がほとんど明示されていないため、やや時間がかかったと思われます。なお、最終問題は問題文が読みにくいため、時間に余裕がない受験生は、より焦りを感じたのではないかと思います。例年、第3部は時間管理に失敗する受験生が多いため、第2回目の試験でも十分な注意が必要です。

(4) 小括

第1部～第3部までを通して、例年通り、「過去問で問われたことを身につけているか否か」が、重要な要素となります。また、過去問は、直近のものだけをやればよいというものではなく、実施当初のものも含めて演習をしておく必要があります。加えて、すべての部に共通するものとして、時間管理も重要な要素といえます。これは、第2回目の試験でも同様ですので、今回の試験を時間管理で失敗した方は、第2回目に向けてその点を意識する必要があります。

2. 各部の内容について

(1) 第1部：論理的判断力を測る問題（40分）

① 出題形式

大問数：24問 小問数：24

② 全体の傾向

例年通り、大問24問、小問24問となっています。この出題数は例年変更されていませんので、もはや定着したといえます。また、傾向としては、従来どおり、論理関係や発言の関係を問う基礎的な問題（問題2、13、17、22など）、資料解釈を知っていれば解きやすい問題（問題11、14、15、19）が出題されたほか、形式論理の影響が強い問題も例年通り出題されました（問題4、5）。

異なる点としては、作業量の多い、いわゆるパズル系の問題が目立ちました（問題12、16、21）。また、問題23のようにルールを把握したうえで、具体的な数字をあてはめていく問題も見られます。こうした問題は、かつて存在した大学入試センター主催適性試験で出題されていた問題に共通するところがあります。また、昨年度は出題されなかった、比較的長い文章を読ませるものも出題されました（問題24）。これは2010年度の問題16、2008年度の問題15と類似するもので、解答にやや時間がかかりますので、時間不足で解けなかった受験生も多いと思われます。

③ 特徴的な問題

問題1：資料解釈の能力を端的に問う問題です。適性試験でよくみられるタイプの問題で、過去問でも何度も出されていますので、確実に正解する必要があります。

問題10：各選択肢ごとに形式論理の要素と資料解釈の要素が混在しており、推論についての総合的な能力を要求する問題です。ただし、問われている内容自体は非常に基礎的なものですので、確実に正解する必要があります。

問題 1 1 : 具体的な数字をもとに、資料から読み取れる情報とそうでないものを判断させる問題です。適性試験における資料解釈問題として、典型的なものとなります。

問題 2 3 : 一見すると時間のかかるパズル問題という印象を受けますが、ルールを正面から検討するのではなく、選択肢を当てはめてみると簡単に解ける問題です。他の年度でも、こうした発想で解く問題がありますので、過去問の検討が重要であることを知らされる問題です。

問題 2 4 : 出題順が最後の問題ですので、多くの受験生が時間不足で解けなかったのではないかと思います。それほど難易度は高くないため、それまでの時間管理に成功していれば容易に解答することができます。

(2) 第 2 部 分析的判断力を測る問題 (40 分)

① 出題形式

大問数 : 4 小問数 : 24

② 全体の傾向

問題数などの出題形式について、ここ数年の本試験と同様です。大問数 4 問、各大問に小問 6 つずつというパターンはもはや固定化したといえるでしょう。出題された問題を概観すると、旧来型の作業中心のものがほとんどでしたため、過去問などを使って表の書き方や情報の整理など事務処理方法を身に付けていた受験生ならばともかく、そうでない受験生は時間不足に陥ったのではないかと思います。

基礎的なメモや図の書き方、論理操作の方法はもちろん、過去問などを利用して、早く正確に作業する能力を身につけておくことが必要だった出題です。

③ 特徴的な問題

今年度も、昨年度同様、特徴的と呼べるものは存在しません。すべての問題について淡々と作業を行うのみです。唯一あげるとすれば、問題 3 について、慣れている受験生とそうでない者とで、解答時間に大きな差が出たのではないかと思います。

(3) 第 3 部 長文読解力を測る問題 (40 分)

① 出題形式

大問数 : 4 問 小問数 : 24 問

② 全体の傾向

大問数、小問数ともに例年と同様です。また、内容としても「問題文の内容を理解しようとししっかり読んでいないと絶対に時間不足になる」「解きやすい小問と解きにくい小問が混在している」など、例年と同様です。難易度について、第 1 問、第 2 問では問題文の参照箇所が明示されていない小問が多く、やや時間のかかる問題出題といえます。ただし、内容としては過去問から逸脱するものはないため、時間管理さえできていれば、それほど正答率が低くなることはないでしょう。

問題文の内容は、問題1が政治・権力、問題2がマイノリティ、問題3が人の「行為」について、問題4が哲学に関するもので、分野は幅広く、かつ読みやすい文章から難解な文章まで、全体としてバランスがとれていました。問題文の量も例年通りです。

例年通り、問題文をじっくり読むのではなく、まず各小間を見て検討すべきことをおおよそ理解し、そのうえで問題文を読むと効率よく解くことができたといえます。なお、問題4は哲学に関する文章で、設問文がやや読みにくいので、内容を理解しようとするすると相当程度時間がかかったといえます。

③特徴的な問題

今回の出題中、問題3の設問文は非常に読みやすいため、内容を理解しながら読もうとしがちですが、そうすると解答時間が余分にかかってしまいます。また、小問自体も易問ではないため、ここで時間を多く使ってしまった受験生も多いと思われます。適性試験の第3部では、「各大問10分」という鉄則を守り、全問に目を通すことで高得点を狙いやすくなりますので、今回時間管理に失敗した受験生は、第2回目に向けて、この点を強く意識してください。

(4)第4部 表現力を測る問題 (40分)

①出題形式

大問数：1問のみ

②傾向

これまでの本試験と同様、実際の出題は非常に基礎的な小論文試験です。修学旅行の候補地について、A、Bの見解を理解し、他方に対する配慮も示しつつ自説の論理展開をすることが要求されています。修学旅行の目的や、スキーを行うことの意味など、それぞれの論点ごとに整理して論ずることができれば、一定の評価が得られるでしょう。

3. 総括

新制度で7年目、旧制度から通算で15年目となり、もはや出題内容は完全に出尽くした感があります。これに伴い、各出題に対する対策方法も確立された試験となりました。例年、傾向や難易度について軽微な差異はあれ、適性試験における試験範囲というものは確実に存在します。そのため、対策を練れば確実に高得点が得られます。

なお、第2回目に向けての注意点ですが、今回の第1部で形式論理の割合が低かったこと、2007年以降によく見られたタイプの問題が少なかったこと、また、第2部で着眼点によって解答時間を短縮できるタイプの問題、及び計算系の問題が出題されなかったことから、今回は出題されていない上記の要素を持つ問題の出題が予想されます。